



土岐市教育研究所
TEL 0572-54-1111 (内373)
FAX 0572-55-6310
メールアドレス kyoiku@city.toki.lg.jp
所報 No. 560
発行責任者 所長 塚本 修
発行日 令和3年 11月26日
題字 山田 恭正 教育長



『作品づくりに没頭』

撮影 土岐津小学校
神谷 奎吾 先生

不安

土岐市教育研究所長 塚本 修

どの幼稚園・小中学校においても、そろそろ個別懇談が実施される時期でしょうか。保護者の大部分は、仕事を休んで都合をつけてくださっています。誠意をもって懇談に臨むのは当然のことです。懇談の中で、保護者から苦情が飛び出したとき、皆さんはどんな思いになりますか？「となりのクレマー」などの著書で知られる関根眞一さんの対談記事からです。

教育関係者と一般の社会人とは、苦情の捉え方に大きく違いがあるそうです。外部から苦情が寄せられた場合、教育関係者は「相手の勘違い」「単なるいちゃもん」「クレマー」と考える割合が高いそうです。「学校や自分の配慮不足」に原因があるとはなかなか考えられないようです。また、職場で直接苦情を言われたとき、教育関係者は「面倒だ」「対応だけはするか」と考える割合が高いそうです。学校や自分の行動を振り返る前に、相手に問題があると考えてしまうということです。

先生という職業は「自分の考えは常に正しい」といった錯覚に陥ることがよくあります。民間企業なら、1本の苦情電話がサービスや製品の向上につながることもあります。教育では学校や先生の問題点の指摘が多いため、どうしても腰が引けてしまいます。もしかしたら、このことが、単なる「相談」を「苦情」に変容させてしまっているのかもしれない。

多くの保護者は、子育てに「不安や悩み」をもっています。「あなたは子育てに悩みがありますか？」の問いに、70%以上が「ある」と答えた統計調査もあり

ます。結局、大部分の親は自らの子育てに不安をもち悩んでいるということです。自信をもって子育てができていない保護者が多いのです。

保護者の「不安や悩み」は、そのまま解消されない状態が続くと、園・学校や担任への「不満」となっていく。さらにその「不満」が蓄積されていくと、「不信」となってしまいます。信頼のなくなった関係では、どんな教育活動を行っても理解されず、余分な労力を消費するばかりで決して上手くいくことはありません。「不安」→「不満」→「不信」とならないように、何とか親の不安や悩みを解消したいものです。園や学校側の意識として次のことを共有しておきたいです。

- ・多くの保護者は子育てに不安や悩みをもっているという認識をもつこと。
- ・クレームはあって当たり前。「困った親」は「困っている親」ということ。
- ・保護者が少しでも不安や悩みを解消できるような場を設定すること。
- ・保護者とともに歩み、子どもを育てようという構えをもつこと。

その絶好の機会が個別懇談です。保護者も教師も、健やかな子どもの成長を願って日々努力をしています。保護者・教師という立場は違っても、願いは同じはずです。

改めて学校教育の目的・役割を問う

～ 家庭児童相談のケースから ～

土岐市家庭児童相談員 加藤 紀久朗

小中学校38年間、幼稚園4年間の教職を経て、現在、土岐市家庭児童相談員として5年勤めています。家庭児童相談員の職務に「生活レベルの基準のあり方」が特徴としてあります。例えば、家庭児童相談員の「プラスマイナス0（ゼロ）」の生活基準は食事の献立内容は問いません。学校に行かなくても、宿題をやってもなくても、毎日、三回食事がとれていればOK。風呂はシャワーだけでも毎日浴びていればOK。衣服は洗濯してあればOKが基準です。学校のゼロ基準は毎日の登校。テストはできれば平均点以上を目指す。授業は前を向いて先生の話聞く。これが学校のゼロ基準のひとつの姿であり、学校のスタンダードです。このスタンダードが身につけていない子どもは「落ちこぼれ」であり、その親は「養育力不足」の親です。家庭児童相談のスタンダードからすると学校はまさに「プラス・プラスの世界」です。しかし、学校は「可能性・理想追求の場」であり、家庭児童相談員のスタンダードと違うのも当然です。

子ども・保護者の99%は程度の差はあれどもプラスの世界で生きています。大事なことです。しかし、「僅か1%」ですが、マイナスの世界で生活している子ども、家庭、保護者が存在するのも確かです。多い事例は、適切な食事が摂れていない子どもがいることです。その子どもたちは、給食のおかげで不足分を摂取しています。給食が貴重な栄養源である子どもが存在しており、行動実態として受け止めておくことも大事ではないでしょうか。

本市の小中学校では、事情は違えども年間30日以上欠席者が多数います。家庭児童相談員としての対応からわかったこととして、児童生徒

は家庭の住み心地が良く在宅しているのではなく、登校するエネルギーを家庭で十分にためることが出来ないという現象がみられます。また、その背景には経済的困窮・その家庭独特の風土・その子の特性もあります。要因が複雑であり、すぐに登校につなげることには難しさがあります。また、統計からみると6月、10月、2月に長期欠席者が増加する実態があります。6月は新学期からのがんばり疲れ、10月は慣れからくるダレ、2月は今までの不満という背景があるようです。また、長期欠席者の多くは、学力が身につけていないのが実態です。私も教職42年間「やればできる」と子どもたちを叱咤激励してきました。それは意図的ではありませんが、今、思うと虚言とも言えるものでした。本当は、その子にあった、指導・支援をしていなかったのが事実であったのではないのでしょうか。

子どもといえども、一人ひとりの人生には「家庭の経済力」「学力・思考力」「育ち方」が大きくかかわっています。特に、学力・思考力の不足は生活していくうえで厳しいものとなります。その力を付けるのが、教育の力ともいえます。学校教育活動で「考える機会：考える習慣」を意図的に経験させることは重要なことです。具体的には、自分に「できること」と「できないこと」を判断する力と「人に相談する」力を付けることです。その子なりの「ちょっと立ち止まって考え、判断できる人間」に育てていくことが教育（学校・家庭）の大きな目標であり役割と考えます。ちょっと立ち止まって考え、判断できる力があれば、大きな間違いはしません。大きな間違いをしない人生をどの子にも送って欲しいものです。

西陵中学校区「課題解決指定」における校区の連携について

～校区の研究の取組を振り返って～

下石小学校 教頭 中嶋 聡子

1 はじめに

西陵中学校区では、令和元年度に土岐市課題解決の指定を受け、3校が連携して研究を進めるための組織づくりから取り組みました。

連携する組織として「校長・園長会」「研推長会議」「運営会議」を立ち上げ、統一感のある学習規律や9年間を見通した指導など、3校が共通理解のうえで研究を進めるようにしました。

2 校区連携の組織

(1) 校長・園長会

西陵中学校区では、下石小学校・妻木小学校・西陵中学校の校長と、西部こども園・妻木小学校附属幼稚園・つまぎ保育園の園長が集まり、月に1回「校長・園長会」を行っています。

内容は、研究の方針や研究内容の決定に留まらず、お互いの学校や園の子どもたちの授業の様子を参観したり、子どもたちの様子を交流したりしてきました。また、学校行事を行う際には、実施時期を調整したり、方法や内容の検討や調整をしたりするなどして、連携を図ってきました。

(2) 研推長会議

① 全校研究会への参加

各校では年に3回全校研究会を行います。研推長と担当教頭は3校の研究会に参加してきました。それぞれの学校の授業や指導方法のよさを知ったり、連携の観点から意見を交流したりしてきました。

下石小学校の算数の全校研究会では、西陵中学校校長から「様々な小集団交流を思い切ってやってみよう」と指導を受け、多様な交流活動の中から「2往復のペア交流」が生まれました。

中学校での数学の全研授業を参観した際には、義務教育の出口の学ぶ姿のイメージをもつことができました。また、対話活動では「伝える相手の理解度に合わせながら話すこと」や交流の場面においては「聞く側が視点をもって交流や質問をすることで深め合うことができる」ことを、小中学校で共有することができました。



②9年間の学びを見通した学び方の指導

9年間の学び方の指導を見直す際には、小学校と中学校の宿題の取組方法が話題となり、改善をしました。

小学校では主にドリル学習を中心に取り組んでいます。与えられた宿題だけではなかなか自主的な学びにはつながりません。そこで、小学校4年生以上は、ドリル学習に加えて自主学習に取り組むことを共通の実践としました。現在は「自分のためになる学習をする」ことを強く意識付け、家庭学習に取り組むよう指導しています。

中学校では、提出期日と範囲を指定した宿題の取組指導を大切にしています。そのため、小学6年生では卒業前に中学校の取組方法に慣れることを目指し、中学校1年生では、4・5月に小学校での宿題の取組方法を継続する期間を設け、緩やかな移行を互いに心がけています。

(3) 運営会議

担当校長と3校の教頭、ICT担当が参加し、研究発表会の実施の仕方について検討しました。

特に新型コロナウイルスの感染予防対策にかかわり、3校に参観に来てくださる皆様を安全にお迎えし、授業で頑張る子どもや教職員が安心して取り組むことを主眼に話し合いました。

3 今後の校区連携 ～座談会を通して～

研究発表会の当日、西陵中学校区の教職員が参加する座談会では、「校区連携の成果と課題、来年度以降の取組」について話し合いました。コロナ禍もあり、3校の教職員がしっかり顔を合わせて話し合うのは、研究が始まってから初めてのことでした。

交流では、

- ・授業を見合う機会をもっと増やしていくとよい。
- ・教職員同士の連携に留まらず子ども同士もオンライン等を通して小学校同士や小中学校で連携した取組ができるとよい。

などの意見が出ました。座談会の意見や願いを集約し、校長会の提案・熟議を経て、来年度以降の3校の研究発展に生かしたいと考えています。

【学力向上推進委員会の取組から】

令和3年度 泉小学校の実践報告

学力向上企画委員 泉小学校 野々垣 邦彦

- 土岐市スタンダード授業の重点項目である、
- ①広がり・深まりのある終末の姿の具体化
 - ②「何を」「どう」すればよいかを明確にわかる課題設定
 - ③ICTの効果的な活用
- について、本校の算数科の実践を紹介する。

第5学年 算数「整数の性質」第3時

1 終末の姿の具体化

前時の学習において、倍数、公倍数、最小公倍数の言葉の意味まで理解している。本時は、プログラミング教材「プログル」を使って、様々な数の公倍数、最小公倍数の関係を比べる活動を行う。公倍数は等間隔で並んでいること、公倍数が最小公倍数の倍数になっていることに気付かせたいと思い、終末の姿を以下のように設定した。

【終末の具体】

公倍数を求めるプログラムを使い、公倍数の性質に気づき、最小公倍数を利用して、他の公倍数を求めることができる。

(思考・判断・表現)

2 明確な課題の設定

授業では、プログラミング教材の「プログル」を活用した。



【図】 タブレットを使いプログルをしている様子】

「プログル」を活用する利点として、正しくプログラムを仕組むことが出来れば、どの児童も簡単に正しく公倍数を求められることが挙げられる。一方で、児童自身が自力でプログラムを組めるようになるには、知識と時間が必要になるという問題もある。

そこで、授業を行う際には、「教えること」と「考えさせること」に分け、何ができればいいのかを明確にしたうえで課題を設定した。

教えること …公倍数を求めるプログラム
考えさせること…求められた公倍数からどのような規則があるか。

【学習課題】

2つの数の公倍数を調べ、公倍数のきまりを見つけよう。

3 ICTの効果的な活用

本実践では、「ロイロノート」を使って、前時の復習問題に取り組んだり、公倍数を求めるプログラムの組み方を説明したりした。作業時間の短縮や、画像による分かりやすい説明ができた。

4 今後の実践に向けて

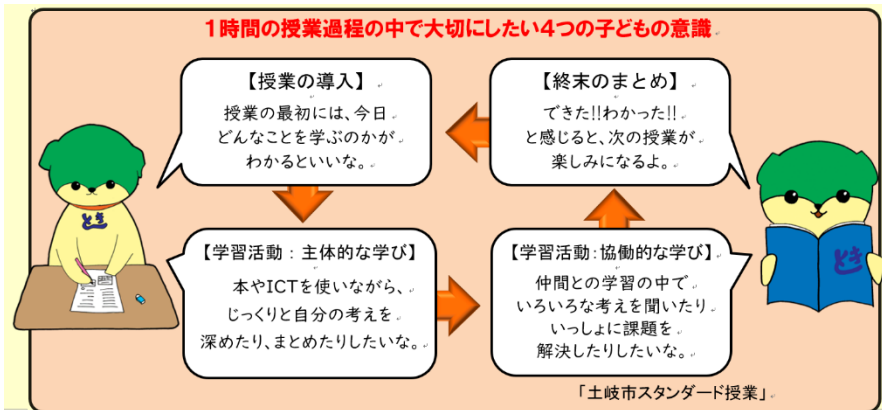
授業の振り返りでは、『最小公倍数を見つけることができれば、他の公倍数はかけ算で簡単に求められることがわかった。』など、公倍数の性質に気付いて感想を書いている児童が多かった。

終末の姿を具体化し、それに向けて何ができればよいかを明確にしたこと、ICTやプログラミング教材を効果的に活用したことが児童の理解を深めることに繋がったと感じている。

今後も、実践を積み重ねていきたい。

各小中学校の学力向上推進 ～学校訪問を通して(その2)～

学力向上推進リーダー 松原 敦也 (下石小学校 教頭)
 教育研究所 主任 加藤 望



今年度は、学力向上推進委員会として市内各学校の教育長訪問に同行しています。

第2版となる本稿も、引き続き、各校の実践を市全体で共有することを目的に、学力向上推進委員会で大切にしている土岐市スタンダード授業の重点とかわらせて紹介します。

【泉中学校 (10/14)】

どの学級も生徒が落ち着いた雰囲気です。先生方もとても活気があり、生徒への関わりがとてもやわらかく、先生と生徒のよい関係性が伝わってきました。

授業では iPad が日常的に課題解決のために使われる「学習の道具」になっていました。全校体制でICT教育を挑戦的に推進してきたことが伺えました。2年生社会科の橋本壮平先生の授業では、黒板に「今日のゴール」と題し、

【今日のゴール】「産業革命とは何か、社会はどう変化したか、説明できること」

を位置付け、本時の終末に何ができればよいのかを子どもたちに具体的に示していました。

泉中学校では「主体性と社会性の育成と伸長」を喫緊の教育課題ととらえ、授業においても生徒が主役となって取り組むことを目指しています。授業づくりにおいては、主体的な子どもの姿を生み出すための授業のデザインや仕組みづくりを研究として進めています。

また、子ども達が授業で主体性と社会性を発揮できるための土台づくりとして、生徒会活動等においても、生徒自ら決定したことに基づき、責任をもって行動をできることを目指して、規則の見直しや行事の運営に関わって、自治的・自発的な活動を積み重ねてみえました。授業以外の活動でも、様々な場で主体的な学び方につながる資質や能力を育んでいこうとする学校の取組姿勢を学びました。(加藤)



【駄知小学校 (10/18)】

若い先生からベテランの先生まで、全ての授業でICT機器を効果的に活用した授業が行われていました。子ども達も迷うことなくタブレットを操作していました。「学習の道具」としてICTが位置付いています。教務主任と研究主任の先生に確認をすると、校内のICT委員会を立ち上げ、定期的に研修を行っているとのことでした。

また、駄知小学校では全国学力・学習状況調

査やNRT等の結果から、「書くこと・説明すること」に弱さがあると分析し、4つの改善の視点として、

- ① 目的を明らかにすること
- ② 目的に応じて書くこと
- ③ 習熟の時間を確保すること
- ④ 家庭学習の定着を図ること

を示されました。各学年は4つの視点を受けた取組を展開するとともに、全校体制で「誇れる授業づくり」の取組（コロナ禍でできなかった授業参観の代替として、管理職が各学級の取組を参観し評価）を行っていました。「学力向上のための取組を組織的・継続的に行っていること」を駄知小学校のあゆみから学ばせていただきました。



現在、研究推進にかかわり、自己表出できる子どもを育む手立てとして、ロイロ・ノートスクールを使って学習状態を見える化（「わからない」「考え中」「教えられる等」）した授業を全校に提案されようとしています。さらなるあゆみの予感がします。（松原）

【泉西小学校（10/19）】

最初に研究主任の先生の授業を参観しました。先生が課題提示を終えると子どもから「できそう！」「早くやりたい！」「先生、もう始めてい

い？」という声が次々と上がりました。児童の興味を引きつける課題提示ができていることはもちろん、子どもが解決の方途をもっているからこそその姿でした。



次に、5人の先生の授業を見ました。驚いたことは、全体交流、グループ交流、スクランブル交流等、形態は様々でしたが、どの授業においても児童が自分の考えを表出していたことでした。しかも、その話し合いは仲間との関わりを通して深まっていきます。話し合いを通して何に気づかせたいかを、授業者が明確にもてなければこうはなりません。

研究主任の先生に確認をすると、泉西小学校では、授業改善の視点として「与えすぎからの脱却」を掲げ、対話活動を取り入れた授業に全職員で挑戦しているとのことでした。また、交流の場面では、何のための交流するのかという目的を明らかにすることを、どの先生も大切に実践されていました。

「土岐市スタンダード授業」令和3年度の重点

- ① 広がり・深まりのある終末の姿の具体化
- ② 「何を」「どう」すればよいかを明確にわかる課題設定

を自校の取組とリンクさせながら実施していたいていることをありがたく感じました。（松原）

令和2年度：第63回、令和3年度：第64回
土岐市美術展幼少年の部 優秀賞受賞者

10月23日・24日に、土岐市美術展幼少年の部を開催しました。昨年度はコロナ対応で開催は中止でした。今年度はコロナウイルス感染防止対策を行い、2年間分の作品を展示する美術展を開催することができました。

ご協力、ありがとうございました。

◆第63回美術展 幼少年の部 優秀賞受賞者

【平面作品の部】

小林美沙希(妻木小1年)	坂井 心(土岐津小2年)	山田 楓(妻木小2年)	平井 七海(泉小3年)
墳原 壮真(下石小4年)	塚本 みお(駄知小4年)	伊藤 唯華(下石小5年)	岩井 心奏(肥田小6年)
可児 雪華(泉小6年)	中村ファチマ(泉中1年)	中垣 結(駄知中2年)	松原 実柑(泉中3年)

【立体作品の部】

酒井 大我(濃南小1年)	林 美月(下石小2年)	太田 惇貴(泉西小2年)	安藤 和成(駄知小3年)
山室 陸斗(土岐津小4年)	間関 みゆ(下石小4年)	村上 夏菜(濃南小5年)	川上 拓夢(駄知小5年)
柴田 梨央(妻木小6年)	百瀬 光輝(泉中1年)	西尾 百花(泉中1年)	成瀬 帆夏(駄知中2年)

【書写の部】

矢野 遥都(土岐津小1年)	堀 ことと(駄知小1年)	羽柴 杏菜(土岐津小2年)	尾崎 貴亮(妻木小2年)
高木 咲希(土岐津小3年)	中嶋 桐也(濃南小3年)	今井 桜(駄知小4年)	糸野つばさ(泉西小4年)
石井 月渚(肥田小5年)	水野 杏南(肥田小5年)	梶浦 花実(妻木小6年)	丹羽 智哉(肥田小6年)

◆第64回美術展 幼少年の部 優秀賞受賞者

【平面作品の部】

伊藤 凌久(下石小1年)	牧野 瑠華(泉小1年)	加藤菜々花(妻木小2年)	原 市佳(駄知小3年)
堀越 光夏(肥田小3年)	村瀬 疾風(肥田小4年)	齋藤 花野(妻木小5年)	佐橋あかね(土岐津小6年)
大矢 琉偉(土岐津小6年)	藤井 長門(駄知中1年)	児玉 汐音(肥田中1年)	加藤 可也(土岐津中2年)

【立体作品の部】

土岐 高梧(濃南小1年)	西 柚葉(駄知小1年)	小林 遥人(土岐津小2年)	外 ハナカ(泉小3年)
平井 もあ(土岐津小4年)	林 俐来(肥田小4年)	加藤 紀衣(下石小5年)	奥田 煌(妻木小5年)
花井 勇斗(濃南小6年)	杉山 愛祈(西陵中3年)	加藤 里沙(西陵中3年)	長江 美月(濃南中3年)

【書写の部】

都築 乙華(妻木小2年)	水野瑠衣那(泉小2年)
小栗 颯介(泉小2年)	政山 采璃(泉小3年)
後藤 小毬(土岐津小4年)	富丸 結翔(泉小4年)
野々村美星(駄知小6年)	楓 乃愛(肥田小6年)
村山 瑠花(泉小6年)	西尾榮里奈(駄知中1年)
加藤 咲弥(土岐津中2年)	吉村ほのか(西陵中3年)



【2021 土岐市発明くふう展】

【作品の部】

《土岐市長賞》柳生 泰杜(西陵中2年)	《土岐市議会議長賞》伊東 一空(土岐津小4年)
《発明協会土岐支会長賞》水野 祥亜(駄知中3年)	《土岐市地域振興部長賞》川本 翔弥(下石小5年)
《土岐市教育長賞》外山 豊翔(駄知中2年)	
《奨励賞》水野 煌(肥田小6年)	塚本 悠史(泉小3年)
	稲垣 百伽(下石小6年)
	武藤 翔来(下石小3年)

【絵画の部】

《土岐市長賞》宮地 利奈(土岐津小6年)	《土岐市議会議長賞》福岡 彩葉(駄知小2年)
《発明協会土岐支会長賞》福岡 剛毅(駄知小4年)	《土岐市地域振興部長賞》千原 ひかり(下石小3年)
《土岐市教育長賞》千田 桃愛(泉西小5年)	
《奨励賞》くまがい あやは(泉西小1年)	はやし じょう(妻木小1年)
可知井梗介(濃南小5年)	佐長谷光紀(駄知小3年)

紙幅の関係で前号に掲載できなかったため、本号で掲載させていただきました。

「私、草取りが好きなんです！」

妻木小学校 校長 滝川 直樹

今年の夏休み後半は、県にまん延防止等重点措置が発令されていて、愛校作業を実施することができませんでした。そのため、広い運動場が草原のようになり、体育の授業に支障をきたすのではと感じるほどでした。

このような状況の中、運動委員会が休み時間に草取りボランティアの呼びかけをしてくれました。それに応えて児童や教職員が草取りを行い、運動場はみるみるうちに美しくなりました。タイトルにある言葉は、草取りをしている時に、私のそばにいた1年生女子の言葉です。

T：「草取りをしてくれてありがとうね。」

C：「私、草取りが好きなんです！」

T：「草取りが好きなんですすごいね。どうして？」

C：「きれいになるとうれしいです。庭の草取りをよく手伝っています。」

T：「〇〇さんが手伝ってくれるから、家の人はすごく喜んでいてと思うよ。」

言葉のやりとりをしながら、低学年の頃は自分の得意なことを自信満々に話すことができるのに、どうして高学年になると話さなくなってしまうのだろうかと改めて思いました。

子どもは、元々自分の得意なことを誰かに見たり聞いたりしてもらうことが大好きです。その都度、大人が褒めてあげられればよいのですが、タイミングが悪いといつ頭ごなしに「ダメ」「やめなさい」と叱ってしまいがちです。

子どもと接する時には褒めるにせよ、叱るにせよ、まず話をしっかり聞くようにし、“自己肯定感”が高くなるような接し方をしたいものです。

掲 示 板

◆令和3年度 第62回岐阜県学校歯科保健優良校表彰

【大規模校の部】特選校 土岐津小学校 努力校 泉小学校

【中規模校の部】優良校 泉西小学校 【歯科保健推進校】(特選校を3年受賞) 肥田小学校

◆2021 岐阜県発明くふう展

【作品の部】《岐阜県発明協会会長賞》柳生 泰杜(西陵中2年)

《努力賞》稲垣 百伽(下石小6年) 水野 祥亜(駄知中3年)

【絵画の部】《岐阜県町村会長賞》宮地 利奈(土岐津小6年)

◆第65回岐阜県児童生徒科学作品展

《優秀賞》みやけ りな(肥田小1年)

《入 選》小山 悠琉希(土岐津小3年) 井上 耕助(泉小3年) 井本 紗智(肥田小4年)

加藤 遙真(土岐津小5年) 山野 藤子(土岐津小6年)

宮地 利奈(土岐津小6年) 岩本 汰朗(土岐津中2年)

◆第21回岐阜県社会科課題追究学習作品展

《優秀賞》高橋 咲(泉西小3年)

《入 選》小山 凜咲希(土岐津小5年)

おめでとうございます

